

<優秀卒業論文>

イギリスの各種就学前教育施設と ナニーについての考察

学籍番号
氏名

12530110
松本 亜弓

目 次

序論	244
第1章 イギリスの就学前教育施設と制度について	
1.1 幼児学習目標と基礎段階カリキュラム	245
1.2 イギリスの就学前教育施設や制度での教育	245
1.2.1 保育学校 (Nursery School)	245
1.2.1.1 保育クラス	245
1.2.1.2 リセプションクラス?	246
1.2.2 保育所/デイ・ナースリー (Day Nurseries)	246
1.2.3 保育ママ/チャイルド・マインダー (Child Minder)	246
1.2.4 合同保育センター (Combined Nursery Centres)	247
1.2.5 就学前遊戯集団/プレイグループ (Pre-School Playgroups)	247
1.2.6 母と3歳以下の子どものための集団/マザー・アンド・トッド ラー・グループ (Mother&Toddler Groups)	247
1.2.7 ナニー (Nanny)	247
1.3 就学前教育での家庭教育 (しつけ)	248
1.3.1 乳幼児の生活習慣の厳守	248
1.3.2 大人と子どもの区別	249
1.3.3 幼児の言語による自己主張	249
第2章 イギリスにおけるナニーの伝統	
2.1 ナニーの歴史	252
2.2 ナニーの雇用形態	253
2.3 ナニーによるしつけ	253
2.3.1 ナニーの言葉選び	253
2.3.2 子守歌によるしつけ	254
2.4 ナニーからガヴァネスへの交代	254
2.5 ナニーの資格・養成校	256
2.5.1 ノーランド・カレッジの教育課程	257
2.5.1.1 1892年のカリキュラム	257
2.5.1.2 1903年のカリキュラム	257
2.5.2 ノーランド・カレッジ成績評価項目・紹介状	257

第3章 20世紀以降におけるナニーの変化	
3.1 オールド・ファッション・ナニー	260
3.1.1 マリオン・バットへのインタビュー	260
3.1.2 アイリーン・ボタレルへのインタビュー	261
3.1.3 ジリアン・ボタレルへのインタビュー	261
3.2 現代のナニー	262
3.2.1 秋島百合子『イギリスの女性たち』から、現代のナニーへのインタビュー	262
3.2.1.1 ナニーという職業を選択した動機	262
3.2.1.2 現代のナニーの仕事内容	262
3.2.1.3 現代のナニーが描く将来	263
3.2.1.4 現代のナニーから見たオールド・ファッション・ナニー	263
3.2.2 オールド・ファッション・ナニーと現代のナニーの相違点	263
結論	265
引用参考文献	267

序論

オーストラリア生まれのイギリスの児童文学作家 P.L. トラヴァース (Pamela Lyndon Travers 1899-1996) の『風によってきたメアリー・ポピンズ』(*Mary Poppins* 1934) は、1964年に公開されたディズニー映画『メアリー・ポピンズ』の原作である。トラヴァースは『メアリー・ポピンズ』シリーズを書き、これにより全世界に広く知られると共に、多くの人に親しまれてきた。

『メアリー・ポピンズ』の原作と映画では、主人公のメアリー・ポピンズの性格が大きく異なる。原作のメアリー・ポピンズは常に鼻を鳴らし不機嫌で高圧的な愛想のないナニーとして描写されているが、映画では明るく穏やかな人柄で描かれている。なぜ原作のメアリー・ポピンズはこんなにも不愛想なのだろうか。原作と映画の、ナニーにギャップを感じる人が多いのではないか。

2013年に『ウォルト・ディズニーの約束』というディズニー映画が公開となり、その中で P.L. トラヴァースとウォルト・ディズニーの映画の制作秘話が紹介されている。彼女は頑なに映画化を拒んだというが、それはただ頑固な性格だからという理由だけではない。実は、『メアリー・ポピンズ』には、誰も知らないトラヴァース自身の幼少期の実体験が含まれているのである。

メアリー・ポピンズのモデルになったのは、母親の姉にあたる、トラヴァースの伯母である。幼少期に家庭が崩壊しかけた時、家を訪れて妹一家(トラヴァースの家族)を支えた。この時に、トラヴァースの中に、救世主は来訪者という考えが生まれたのではないだろうか。そして、来訪者であり、幼い頃から子どもの身近にいるナニーに注目し、『メアリー・ポピンズ』の物語に繋がったのではないのだろうか。

この作品中のバンクス氏のモデルはトラヴァースの父親である。職業はバンクス氏と同じ銀行員であったが、バンクス氏とは反対に子供を喜ばせようと努力する良い父親であったらしい。良い父親ではあったが、実はアルコール中毒であり、トラヴァースが幼い頃に亡くなってしまう。トラヴァースは父親への尊敬が強く、彼は素晴らしい人だったと思い続けている。その想いをウォルト・ディズニーが知り、この映画の構成をトラヴァースが映画に反対する一因となっていた子どもたちを中心とした構成から、ジョージ・バンクスにも焦点が当たる構成に変え、家族との繋がりを強調した場面で幕を閉じることにしたのである。映画では明るいメアリー・ポピンズのおかげでとげとげしかったバンクス氏に優しさが感じられるようになり、バンクス家は円満な家庭へと変化を遂げる。

このように、ナニーとは子どもの頃から身近な存在として心の中に居続けるものであり、その影響力は大きい。そこでこの論文では、第1章ではイギリスの就学前教育の全体像を探り、第2章では対象をナニーに絞って現代のナニーを生み出した歴史的、文化的背景を考察する。そして最後に第3章では、時代と共に姿を変化させてきた新旧のナニーを比較対照したい。

第1章 イギリスの就学前教育施設と制度について

イギリスの初等教育が開始されるまでの教育である就学前教育は、0歳から5歳の子どもを対象とし、就学前教育施設での教育と、家庭内での教育（しつけ）が中心となっている。

この章では、1.1イギリスの幼児学習目標と基礎段階カリキュラムと、1.2ナニーを含む就学前教育施設や制度および、1.3家庭内での教育（しつけ）について少し詳しく見てみたい。

1.1 幼児学習目標と基礎段階カリキュラム

イギリスでは1990年10月に政府はイングランド内で全国カリキュラム・キーステージ1と2¹に先行する、基礎段階の導入を表明した。基礎段階は3歳から5歳までの子どもたちを対象とし、次の6つの学習領域から構成されている。a. 人格的・社会的情緒的発達、b. 言語と読み書き、c. 算数、d. 世界の知識と理解、e. 身体的発達、f. 創造的発達である。これらの6領域は、保育者が学習環境や活動等の計画を立てるのに役立たせることができるため、幼児教育課程の枠組みを提供している。(米山159-160)

1.2 イギリスの就学前教育施設や制度

イギリスでは、就学前教育を受ける子どもたちがどのような環境で教育を受けているのか、佐藤啓子の『イギリスの家庭と幼児教育』と米山佳樹の「イギリスの就学前教育制度の現状と特色」から紹介する。

1.2.1 保育学校 (Nursery School)

保育学校には、保育クラスとリセプションクラスという2つのクラスがある。イギリスでは5歳から義務教育が始まり、すべての5歳児は誕生日が来ると小学校に入学となる。保育学校は1944年のバター法によって初等学校制度の第1段階として位置づけられ、就学前児童の多くは保育学校に通っている。保育学校では一般に3歳から4歳を保育している。学校は学期期間中だけ週に5日開かれ、保育時間は一般的に午前9時から午後3時30分までである。主としてパートタイム制であり、午前組と午後組に幼児が平均23名のクラスでそれぞれ2時間半ずつ保育されている。中には、働く母親のニーズを満たすため、午前8時から午後6時まで開いている保育学校もある。そして、保育学校の設置が困難な地域では、小学校に3、4歳児を対象とした保育クラス、あるいは満5歳に近い子どものためにリセプションクラスが付設されている。公立の保育学校では、食費や遠足費を除いて、保育料は無料である。私立の保育学校もあり、2歳から5歳児が通い、保育料が週当たり50ポンド～200ポンドもかかるため、裕福な家庭のみが利用していると推測できる。(米山158-160)

1.2.1.1 保育クラス

保育クラスは、公立小学校の一部として無償で運営され、地方教育局によって管轄されている。

1 イギリスの教育には年齢による学習段階の区分がある。義務教育の学習段階の区分は、キー・ステージ1（5～7歳）、キー・ステージ2（7～11歳）、キー・ステージ3（11～14歳）、キー・ステージ4（14～16歳）とされている。(山本11)

これは、主としてパートタイム制である。午前9時から3時30分まで開かれ、その地域に住む3、4歳児が午前の部か午後の部に2時間から2時間30分通っている。働いているスタッフは、教師 (Nursery Teacher) と助手 (Nursery Assistant) であり、大人と子どもの比率は1:13である。保育クラスでは、保育学校やリセプションクラスと同様に、基礎カリキュラムに基づいた教育が提供されている。(米山160)

1.2.1.2 リセプションクラス

リセプションクラスは、公立小学校の一部として運営され、満5歳に近い子どもに無料でフルタイム制の幼児教育を提供している。学期期間中のみ、一般に午前9時から午後3時30分まで開かれている。クラスの規模については特に制限がないが、最大30人とされている。スタッフは、小学校教師および資格のあるクラス助手である。大人と子どもの比率は1:15となっている。昨今では満5歳近くになると、パートタイム制の保育学校や保育クラスからフルタイム制のリセプションクラスに移るのが一般的となりつつある。(米山160)

1.2.2 保育所/デイ・ナースリー (Day Nurseries)

働く母親の子どもたちのための保育施設であり、原則として、清掃のための2週間の休園を除き、年中開設されている。午前8時から午後6時まで開園、子どもの入所年齢は、生後3ヶ月から5歳までとなっている。働いているスタッフと子どもたちの割合は、1:1、1:4、1:5と年齢によって異なる。働いているスタッフは保母 (Nursery Nurse) と社会福祉士 (Social Worker) か保健婦がいる。

全ての保育園は公立や私立に関係なく地方公共団体に登録され、定期的にスタッフの状態や衛生面などが調査されている。

このデイ・ナースリーは、教育面以上に世話 (保護) の面に重点が置かれてきたが、近年では少しずつ教育的側面も導入されるようになってきている。デイ・ナースリーのような施設の数は非常に少ないため、最も必要度の高い家庭の子どもたちが優先的に入所している。優先される子どもとは、ハンディキャップのある子どもや母親が日中子どもの世話が出来ない家庭の子ども等、また、働いているということだけでなく、母親自身に何らかの問題があるために世話が出来ないというケースも含まれる。また、保育料は支払う仕組みになっているが、多くの親たちは全額か部分免除されているのが現状である。(佐藤71-72)

1.2.3 保育ママ/チャイルド・マインダー (Child Minder)

デイ・ナースリーだけでは働く母親たちの要求を満たすことができないため、就学前の子どもを持つ母親たちで親類・縁者に子どもの面倒を見てもらえない場合には、チャイルド・マインダーに面倒を見てもらえる制度がある。チャイルド・マインダーの自宅で、0歳から8歳未満の子どもを、保育ママ自身の子どもを含めて6人以下、1日2時間以上世話をする。5歳未満の子どもであれば3人まで預かることができる。保育ママは、3人から5人以内の子ども (自分の子どもを含む) の世話をする。通常、地方公共団体に登録され、保育する彼等の家が健康的で安全な場所であるかどうかはしっかりと調査される。

通常1年中保育し、料金は直接母親との間で決められる。最近では、チャイルド・マインダーの家ではなく、最寄りの子どもの家で保育が行われる場合も生じている。(佐藤73) (米山164)

1.2.4 合同保育センター (Combined Nursery Centres)

保育的側面と教育的側面を取り入れて組織化された施設が、合同保育センターである。0歳～5歳までの子どもに対して、年間を通して保護（世話）と教育を行っている。ここでは、親が仕事の関係で開始時間よりも遅く子どもを連れてきても、終了時間よりも早く連れて帰ろうとも自由である。（佐藤73-74）

1.2.5 就学前遊戯集団/プレイグループ (Pre-School Playgroups)

就学前遊戯集団は、およそ50年前に子どもたちに遊び仲間、遊び場、遊びの時間を与えるために作られた。また、特別な教育要求のある子どもたちのためのグループも用意されている。このグループの主な目的は、両親、特に母親の親としての役割を強化し、家族の向上のために母親が何をしたらよいかを教えることである。通常学校の学期と同じ時期に始まり、午前中2～3時間、1週間に3～4日間行われる。スタッフと子どもの割合は1：8の範囲であり、子どもの入団年齢は2歳半～4歳である。しかし現在では、4歳の子どもは他の施設に入るため、このグループに入ることは少ない。理由としては、プレイグループの経費が親の自己負担であるのに対し、公立学校であれば授業料が無償であるということや、親が子どもをより専門的な教育機関に入れたいという考えがあることが挙げられる。働いているスタッフは専門のスタッフの他に、子どもたちの母親がボランティアとして参加していることもある。多くのプレイグループの活動場所は、教会のホールやコミュニティセンター、スポーツセンターであり、スタッフは活動の前後に遊具を用意し、片付けもする。様々な種類の遊びが用意され、子どもたちはそこで探索や発見をし、話し方などを学ぶため、イギリスにおける就学前教育の重要な部分を担っている。（佐藤75-76）

1.2.6 母と3歳以下の子どものための集団/マザー・アンド・トッドラー・グループ (Mother & Toddler Groups)

このグループは名前の通り、3歳以下の子どものための施設である。多くは1週間に1回、2時間行われている。全てのイギリスの母と子は、何らかのマザー・アンド・トッドラー・グループに参加している。このクラブは、母親だけでなく、保育ママ、父親、祖父母他、関心のある人なら誰でも参加することができる。このクラブの良い点は、子どもたちの両親や養育者が、子どもたちと共にそのグループにそのまま残り続けられることである。

このグループの主な目的は、子どもたちが近くで遊んでいる間に、母親（養育者）たちが互いに会う機会を提供すること、親としての問題や楽しみを相互に分ち合う時間を与えることである。全国の至る所に存在し、これらの活動の場が、時には相談所であり、保健所であり、学校の教室でもある。このクラブは子どもたちだけでなく大人たちにとっても良い空間となっている。（佐藤76-77）

1.2.7 ナニー (Nanny)

ナニーは裕福な家庭に雇われ、炊事や洗濯、買い物等の家事とともに、主として0歳から5歳の子どもを個別的に世話している。2000年に行われたイングランドの調査では約10万人のナニーがフルタイム、あるいはパートタイムで働いていることが分かっている。ナニーは主に3つのタイプに分けられる。1つ目は伝統的な住み込みのナニー（オールド・ファッション・ナニー）で、雇用する家庭は給与に加え、ナニー用の寝室と食事を提供する。2つ目は通いのナニーで、雇用された家庭に通い、子どもの世話をする。3つ目は、別の家族と共用するナニー（シェア・ナニー）

である。ナニーが二世帯以上の子どもを世話している場合には、チャイルド・マインダーとして教育基準局に登録する必要がある。就職先は斡旋機関や広告、以前の雇い主からの推薦状や口コミなどを通じて見つける。現在ではナニーの養成校も存在し、時代とともに変化を遂げている。(米山165)

1.3 就学前教育での家庭教育(しつけ)

最後に就学前教育での家庭教育(しつけ)について紹介する。ここでは佐藤淑子の『イギリスのいい子 日本の子いい子』の中で挙げられている、イギリスの家庭教育(しつけ)の特徴を3つ紹介したい。

1.3.1 乳幼児の生活習慣の厳守

イギリスの乳幼児期のしつけはヴィクトリア時代(1837~1901)に顕著であり、『不思議の国のアリス』の中で、作者のルイス・キャロルは泣きわめく赤子を公爵夫人が空中に投げたは受けとめて泣きやませようとする様子を描いている。また、ジョン・テニエルの挿し絵に、泣き叫ぶ赤子を乱暴にあやす、見るも恐ろしい風貌の公爵夫人の絵があるが、これは当時の乳幼児に対する大人の厳しい扱いを風刺していると言われている。(佐藤46)

佐藤はイギリスのヴィクトリア時代(1837~1901)の終焉後のしつけについて、J. ニューソンとE. ニューソンが1923年に出した、イギリスの育児書『マザークラフトマニュアル』において、生後1年目の赤子の育て方を次のように指導していると紹介している。

泣くとすぐに抱き上げられたり授乳される子どもは暴君のようになってしまう。決められた時間に授乳され、寝かされ、決まった時間だけ遊んでもらえる子どもは、自己抑制、従順、大人の威厳を認めること、年長者への尊敬などのしつけがなされる。規則正しい習慣をしつけることが子どもを従順にさせる(1928年版)。(46)

しかしながらニューソンらは、伝統的な厳しいイギリスの乳幼児期のしつけは、乳幼児の死亡率の高い時代の宗教心の厚い親に、子どもを厳しくしつけることが、子どもの死後その子の魂を救うという考えがいきわたっていたからであるという見方を提示している。そして、一世を風靡した『マザークラフトマニュアル』の子どもの授乳や就寝時間、母子のスキンシップを厳しくコントロールすることを説く子育ての権威への反発や、子どもを可愛がる気持ちが当時のイギリス人の母親になかったわけではないことも主張している。(佐藤46-47)

ニューソンらによれば、このような厳格な育児方法が維持される一方で、1930年代初頭には、新しく自然主義が台頭した。この頃、ロンドン大学教育研究所に児童発達研究室を創設したスーザン・アイザックス(1885-1948)の幼児教育論にあるように、子どもを抱いたり子どもと遊び親しむことや、指しゃぶりなどの子どもの悪癖の矯正においても、慈愛に満ちた育児方法が奨励されるようになった。さらに、第2次世界大戦以降、ヒューマニズムの高まりとともに、家庭生活を楽しもうという傾向や誰かに指示されることなく自分たちのやり方で子どもを育てていこうとする個人主義の傾向が強まった。(佐藤47)

現代のイギリスでは、親が子どもを抱くことや、一緒に遊ぶことが大切であると考えられている。しかし、子どもに対しての規則正しい生活時間は、現代に引き継がれ、乳幼児については決まった時間に食事を与え、就寝させることは非常に大切であると考えられている。そのためイギ

リスでは、父の帰りを待つことや来客と夕食を取る等、大人の都合に合わせてことによって、乳幼児の食事時間や就寝時間が遅れることを慎む傾向がみられる。(佐藤47-48)

1.3.2 大人と子どもの区別

イギリスでは、大人と子どもとが厳格に区別される。例として、大人と子どもでは口にできる食べ物が異なっていることが多い。子どもは簡単な決まりきったものを食べさせられ、早めに寝かせつけられる。この背景には、イギリス人が食事に関して保守的であり、食べ慣れないものを小さい子どもに食べさせることに警戒心を抱いていることが挙げられる。また、大人と子どもは興味の対象もその楽しみ方も異なっているという理念のもと、大人の楽しみに子どもが巻き込まれることを避け、子どもは子どもで別に過ごす方が良いという考えを持つ。と同時に、大人同士の社交やくつろぎの時間は子ども抜きで過ごしたいという気持ちを強く持っている大人が多く存在するため、子どもを残して夫婦だけで出かける習慣も多くみられる。(佐藤48-49)

大人と子どもの区別が浸透していることが顕著に感じられる例として、旅行のプランが挙げられる。パック旅行の発祥の地であり、イギリス人がよく訪れるヨーロッパのリゾート地では、子ども向けのスポーツや遊びを盛り込んだキッズプログラムを充実させ、子どもは親と別に過ごすことが出来るように配慮されていることが多い。また、ディナーに招かれて訪問した家の玄関先に、その子どもたちがパジャマ姿で出迎えた場合、訪問客は決して良い顔をしないという事例からも、大人と子どもの区別が明確であることが分かる。(佐藤48-49)

1.3.3 幼児の言語による自己主張

ヴィクトリア時代のイギリスには「子どもたちは見られる存在であって聴かれる存在ではない」という有名な警句があった。しかしながら、現代のイギリスでは、幼児の言語による自己主張を重んじる傾向にある。(佐藤49)

かつてはタブーであった幼児の言語による自己表現について、先述のニューソンらは1968年にイギリス中部のノッティンガムで700人の4歳児の子育てを調査しているが、中産階級²と労働者階級の親のしつけに大きな違いを見出している。子どもをしつけるために、中産階級の親は言葉によって統制するが、労働者階級の親は体罰等の非言語的手段に訴える傾向がある。また、中産階級の母親は子ども同士のけんかに介入し、それによって子どもに何が正しいのかを教えようとする。そして、この介入の際に中産階級の母親は言葉のやり取りを通して自分の子どもと関わる時間が増加する。このときに、子どもは自分の方が正しいと、その主張の根拠を提示する能力と上手なコミュニケーションによって母親に理解してもらえようとする。これは子どもにとって、親子のより対等なスタンスや権威主義的でない教育方針を勝ち取ることにつながるといえる。(佐藤49-50)

これとは対照的に、労働者階級の母親は、けんかを子ども同士で解決させる傾向にあった。そもそも労働者階級の親は、子どもが親に事情を説明することを促すことや、子どもが納得するま

2 イギリス人の階級は主に3つに区分されている。アッパー・クラス (upper class 上流階級)、ミドル・クラス (middle class 中流階級)、ワーキング・クラス (working class 労働階級または勤労階級) である。1974年にイギリス人に対して行われた、自分自身がどの階級に属しているかという世論調査においては、アッパー・クラス (Upper class) 0.3%、アッパー・ミドル・クラス (upper middle class) 2.3%、ミドル・クラス (middle class) 30.9%、ロウワー・ミドル・クラス (lower middle class) 11.6%、ワーキング・クラス (working class) 49.0%という結果となった。(木内163-164)

で何が正しいのかを説明するしつけの姿勢をとらないと言われてきた。(佐藤50)

佐藤によると、イギリスの言語学者であるバジル・バーンステイン (1924-2000) が、中産階級では精密コード (精細な理解を与えるための説明的発話) を使用し、労働者階級では制限コード (命令的または慣習的な発話) を使用すると述べている。(50)

ここで言う精密コードと制限コードの具体例は次のようなものである。

—精密コード—

親「早く寝なさい」

子「どうして」

親「早く寝ないと、明日の朝起きるのがつらいわよ。今朝も眠い眠いって言ってたじゃないの」

子「明日の朝はちゃんと起きるから、もう少し本を読んでいていい？」

親「じゃあ、きりのいいところまで来たら明かりを消しなさいね」

—制限コード—

親「早く寝なさい」

子「どうして」

親「早く寝ろと言ったら寝ろと言ってるんだ」

(佐藤50-51)

この2つを比較すると、一目瞭然でどちらの教育を受けた子どもが将来的に良いコミュニケーションを取れる大人になるか検討がつく。

また、佐藤は子どもの言語による自己主張について、ロンドン大学で『幼児教育のカリキュラム』(*A Curriculum for the Pre-school Child*) を著したオードリー・カーティスにイギリスの子育ての特徴についてのインタビューをした時のことを紹介している。(51)

カーティスは自身の子育てを振り返りながら、「そうね、交渉 (negotiation) を随分したものだったわ」と答えた。佐藤が「ご自分のお子さんと交渉 (negotiation) ですか？」と聞き返すと、仕事と子育てを両立するために、様々な場面で仕事に割く時間と子どもの欲求を満たす時間との割り振りについて、子どもの納得がいくまで話し合ったものだったとの答えであった。ここでも、大人が子どもの言語による自己主張を尊重し、親の権威をただ押しつけるのではなく、親子の対等なスタンスを築こうとする姿勢が感じられる。(佐藤51-52)

言語による自己表現を育むためには、論理の展開によって相手を説き伏せるテクニックが必要であり、そのためには論理的思考を身に付けることが不可欠である。実際イギリスでは中産階級の子どもが受験する、セブンプラスという7歳児の私立小学校入学への入学試験において、reasoning という論理の推理の能力を見る問題もある。それほどに論理的な思考能力を重要視していると判断できる。(佐藤52)

イギリスでは親と子どもの双方向のコミュニケーションを持ち、情報や意見をお互いに発している。他の幼児を対象とした調査においても、イギリスの家庭では73%の会話が子どもによって始められていることが明らかになっている。(佐藤53-54)

イギリスの家庭教育の特徴として、幼児の生活時間の厳守と大人と子どもの時間の区別、そして中産階級では幼児の言語による自己表現の尊重が挙げられる。

以上のように、イギリスでは就学前の子どもたちに対して様々な施設や制度が設けられている

が、就学前教育に携わる者の中でも、形を変化させながら、古くから現在に至るまで人々に必要とされているナニーには、必要とされる多くの理由がある。次章では、以上のような背景を踏まえてナニーについて、さらに詳しく探してみたい。

第2章 イギリスにおけるナニーの伝統

イギリスにおけるナニー (nanny) とは日本語でいう「乳母」にあたる。生後間もない乳児から家庭教師がつくまでの期間や、学校に通学し始める前の重要な時期に子どもの世話をする。本章では、イギリスにおけるナニーがどのような職業であるのかを、2.1ナニーの歴史、2.2 ナニーの雇用形態、2.3 ナニーによるしつけ、2.4ナニーからガヴァネスへの交代、2.5ナニーの資格・養成校、の5つに注目し、取り上げたい。

2.1 ナニーの歴史

古くからイギリスの上流家庭には、教育の一環として、子どもを幼いうちから他家に預け、その主人に仕えさせるという慣習がある。『英国のナニーの興亡』の著者であるゲイソン・ハーディは、イギリスには子どもは他人の手で厳しくしつけ、苦勞をさせないと立派な大人になれないという考え方がある。この考えに基づいて、子どもを里子に出し、人に仕えさせるという慣習があり、ナニーの制度はその名残だと指摘している。特に男の子の場合は、ナニーの厳しい教育が終わると、さらに厳しく辛い、寄宿学校という世界に入れられる。そうした試練を乗り越えて、はじめて一人前のアッパー・クラス、あるいはアッパー・ミドル・クラスのメンバーとなるのだという考え方がある。(新井84-85)

この慣習は12、13世紀にまで遡ることができ、それが保護者以外の手による子育てを日常化させてきた。また、乳飲み子に母乳を与えるためにウェット・ナース (乳母) を雇うことや子どもを里子に出し、他人が子育てをするといったことが富裕層の間ではごく普通に行われていた。しかし、ウェット・ナースの雇用は、ヨーロッパ諸国に先立ち、19世紀以前にすたれてしまう。これは、生母自身による母乳哺育の意義が強調され、この階級の母親に受容されたためである。(楯78)

その一方で、哺乳以外の育児を担当する「子ども付きのナース」(Children Nurse/Maid in the Nursery) の雇用は、19世紀頃より増加し始める。そこでウェット・ナースと子ども付きのナースを区別する必要や、発音が十分でない幼い子どもの呼びかけの表現から、子ども付きのナースを指す「ナナ」や「ナニー」という言葉が生まれたと推測される。この「ナニー」という呼び名が一般的になったのは1920年代だと言われている。それまでは「ナース」[乳母]と呼ばれていたのである。(新井80) また、上記のように、ナーサリー (保育室) は、屋敷内の子どものための別空間という意味を持ち、そこではおそらく、母親 (女主人) だけでなく、女中が子どもの面倒を見ている。だが、そのような者を指す言葉は18世紀に入るまで見当たらない。(楯78)

ナーサリーが一般化した18世紀になり、ようやくロッカー (揺すり手) と呼ばれる者が現れ、使用人の中に、職務をナーサリー内の仕事に特定された者が登場するのである。ロッカーは、揺りかごを揺すり、赤子をきれいにする役目である。12、3歳の若さであることも少なくなく、家内女中の最下位に位置する。しかし、この言葉は19世紀に消滅し、ナーサリー・メイド (保育室付き女中) に変化した。彼女らはロッカー (揺すり手) とは異なり、主人の子どもを全面的に世話する役割である。従って、屋敷内での地位は重く、主人と使用人の間に位置する地位を確立することとなる。(楯78)

19世紀のヴィクトリア期になると、ナニーの需要が一層高まる。アッパー・クラスのみならず、アッパー・ミドル・クラスの住居でも子供部屋が大人の世界から切り離され、子どもたちは住み

込みの育児担当使用人と1日のほとんどを過ごすようになる。主な要因は、産業革命による上流階級・上層中産階級の急速かつ著しい富裕化にあったと考えられる。彼らは一族の富の誇示のために広大な敷地を構え、洗練と豪華を競う社交生活に明け暮れるようになる。そのため、各家の財産に応じた階層分化をも遂げた。子ども部屋付き使用人は、育児担当のナニーだけでなく、掃除や洗濯など下働き担当のナーサリー・メイドも加わり、(さらに富裕な家ではヘッド・ナース [すなわちナニー] のほかアシスタントとしてアンダー・ナースが雇われ、その下に複数のナーサリー・メイドが存在することがある) 19世紀においては、ナニーになるためにナーサリー・メイドとして雇われた者が先輩ナニーのもとで修業を経て、やがてナニーに昇格するというルートが存在していた。(藤田75-76) 藤田はイギリスの社交生活において、女主人の遊惰な暮らしぶりの顕示は重要なステータス・シンボルとされていたとしている。(75) 子育てを赤の他人に委ねるのを厭わない風土や富の顕示など様々な要因が加わったことで、ナニーの存在はイギリスの子育てには欠かせないものとなる。

2.2 ナニーの雇用形態

ナニーは通常、子供の保護者と採用された志願者の間で交わされる個別契約により雇用される。(楯77)昨今の雇用では住み込みのナニーと通いのナニー、そして別の家族と共用するナニー(シェアナニー)の3つに分類される。(米村165)

P.L.トラヴァース作『風によってきたメアリー・ポピンズ』の主人公のように、住み込みで朝から晩まで子供の世話をする場合、雇い主は相応の給料を支払う。加えて、年次休暇及び疾病時休暇等に充てられる有給保障、ナニーが生活するための個室や自動車の貸与費なども支払う必要があり、給与以外の経費も少なくない。また、ナニー雇用に伴う経費は、公的補助や所得からの経費控除といった措置が設けられていないため、費用負担が可能である限られた高所得層だけがナニーを雇うことが出来る。(楯77-78)しかし、現代では女性の社会進出で夫婦共働き等の家庭が増加し、以前よりも広範囲の家庭でナニーを必要とし、普及しているが、支払う給料等の金銭問題があり、二世帯で1人のナニーを共有し、半額ずつ金銭を出し合うというシェアナニーと呼ばれるナニーも存在している。(秋島(1991)15)

2.3 ナニーによるしつけ

イギリスでは子供部屋のことをナースリー(nursery)と呼ぶが、それは家の中のひとつの孤立した空間であり、ナニーがその支配者である。子どもは生後間もなくナニーの手に託され、食事からトイレのしつけまですべてがナニーの手に任される。ナニーは子供部屋で寝て、朝起きると子どもたちの洗顔を手伝い、服を着せ、朝食をとらせ、その後、1日中子どもたちに付き添う。単に使用人としてついているのではなく、テーブル・マナー、口のきき方、身のこなし、部屋の後片付け等、子どものしつけの全てを行う。そのためナニーは両親のような存在となり、子どもとの関わりが大きい。(新井80)

2.3.1 ナニーの言葉選び

ナニーは子どもに対してどのような言葉を用いてしつけをしているのか、1972年にサー・ヒュー・キャッソンとジョイス・グレンフィルが著した『ナニーの言うこと』からナニーがしつけをする際に使用する言葉を紹介する。

Sit up straight at the table so there's room
for a mouse at the front and a cat at the back.

食卓では、背を伸ばしてお座りなさい
テーブルと体の間にねずみが一匹、
椅子の背と体の間に猫が一匹入る空間をあけて座りなさい

(14)

ナニーはしつけをする時に比喻表現として動物の大きさを言い、幼い子どもが理解しやすいように工夫を交えて教育している。

2.3.2 子守歌によるしつけ

ナニーによるしつけは、子守歌の内容の中にも含まれている。かわいい動物や子どもの話ではなく、将来役立つ教訓を学ばせる。(秋島 (1991) 46)

秋島は『メリー・ポピンズは生きている』の中で、ダグラス・サザランドの『英国紳士 (*The English Gentleman*)』(1981) から次のような詩を紹介している。

Never, never let your gun
Pointed be at anyone…
All the pheasants ever bred
Will not make up for one man dead.

だめ、だめ、鉄砲はね
人に向けてはだめですよ
キジがどんなにたくさんいても
人の命にや代えられない

(46-47)

この本が話題になったのは1978年である。著者のダグラス・サザランドは、スコットランドの小さなお城に住んでいるというジェントルマンで、英国紳士の日常生活や、一生の過ごし方を風刺と愛着の目をもって愉快地描いた。これらの本を読むと、上流階級の生活の中で、ナニーの存在がどれほど大きいものであるかが理解できるという。狩猟というのは上流階級の代名詞のようなものである。狩猟では鉄砲という武器を使用することから、その危険性を子どもが物心ついた頃からしっかりと教えなければならないのである。(秋島 (1991) 47)

2.4 ナニーからガヴァネスへの交代

イギリスの子育てには子どもの成長に伴って、ナニーの次にガヴァネス (governess)³という家庭教師が子どもの教育をするようになる。19世紀のナニーはガヴァネスとは異なり、その多く

3 住み込みの女家庭教師。19世紀のイギリスのレディがレディの身分を失うことなく経済的自立を図る職業。(川本 iv)

は下層階級（ロウアー・ミドル・クラスあるいはワーキング・クラス）の出身であり、学校教育は最小限の者が多かったため、ナニーの話す言葉は訛りのある英語であることが多かった。しかし、ナニーは子どもの部屋で、家主の子ども（特に乳幼児）の世話としつけを任されていたため、食事やトイレのしつけを始め、主人の所属する階級の生活習慣やマナーを子どもたちに教育しなければならない立場にあった。この時、非常に困難であったことは、子どもに話し方を教えることだ。階級制度があるイギリスにおいて、言葉と発音は重要である。下層階級出身のナニーにとって自分が話す言葉や発音をアッパー・ミドル・クラス以上の言葉や発音にし、子どもに教えることは難しいことから、主家の子どもが乳幼児期の5歳～10歳頃までに、ナニーからガヴァネスに交代されるのが多いのは、これが最大の理由とされている。（藤田76）

しかしながら、交代したガヴァネスとの間に良好な関係が築かれなかった場合には、ナニーの解雇とガヴァネスへの交代は、子どもにとって、乳幼児期の愛着対象の乱暴な剥奪であり、心に傷を負うことも少なくなかったことは、容易に想像できる。また、子どもがナニーからガヴァネスへの交代に対して適応出来ない場合も少なくない。（藤田82）

藤田はゲイソン・ハーディの著書の中から、1930年代のウェイマス家のナニーとガヴァネスの間に繰り広げられた壮絶な闘いを紹介している。

家族はいまや、勉強部屋の子どもの両陣営に分裂した。休暇でミス・ヴィガーズ [ガヴァネス、引用者注] が外出すると、勉強部屋の子どもたちはナーサリーに戻ってナニーに甘やかされ、ミス・ヴィガーズに任されていることを同情してもらった。

（中略）

ナニーの勝利を導いたのはクリストファーであった。彼はナニー・マークスを愛しつづけ、彼を乳離れさせようとするミス・ヴィガーズのあらゆる企てに反抗した。それゆえミス・ヴィガーズはクリストファーをひどく嫌った。そして彼を、ナーサリーをいつまでも卒業できない子だと酷評し、いつも彼を怖がらせるのであった。怒鳴りつけたり、定規でぶったりした。ミス・ヴィガーズが居合わせると、クリストファーは麻痺したようになり、特に読書に集中することが全くできなくなった。

（81）

この場合、上記の少年クリストファーの下に小さな赤ん坊もいたことがナニーの存在価値を高め、結果としてガヴァネスが解雇され、ナニーが残ることになったが、これは一般的な例ではなく特殊な例である。雇用主にとって、ナニーはあくまでも乳幼児期のみ子どもを託す存在であり、子どもが少しでも大きくなればガヴァネスに交代させることや、男の子であれば寄宿学校に出す、というのが一般的である。（藤田82）

このため、P.L.トラヴァースの『メアリー・ポピンズ』シリーズに描かれているように、典型的なナニーには、子どもの世話はよくするが、杓子定規に「～こうしなさい」という指示することが多く、悪いことは厳しく叱り、子どもを甘やかさない態度を取る人が多い。この行動の背景には、ナニーが上記のような難しい役回りを求められていたことが挙げられる。（藤田76）

藤田はナニーが子どもにした残酷な仕打ちの具体例を、ゲイソン・ハーディの『英国のナニーの興亡』から引いている。

私がやんちゃ坊主だった3歳の時、私のナニー、ナニー・パルマーはよく私を麻袋に入れ、

その口を縫い閉じて地下室に閉じ込めた。私はその時の凄まじい恐怖を今でも思い出すことが出来る。目も見えず、ほとんど息もできない暗闇——私は泣き叫んだ。彼女は私を出してはくれなかった。彼女は言った。「泣き叫ぶのをやめたら、出してあげます。」だが私は、やめることができなかった。(79)

もちろんナニーには様々なタイプの人がいる。ゲイソーン・ハーディによると、上記のように故意に虐待やいじめをするようなナニーも存在した。しかし、良くないナニーのこのような行動は何らかの形で雇用主である親に伝わり、結果として次の仕事を探す際に必要になる「推薦状」はもらえず、次第に淘汰されていく。ゲイソーン・ハーディの指摘する上記のようなナニーの特徴は、アッパー・クラスあるいはアッパー・ミドル・クラスでの女中奉公を通してナニーになった世代のナニー（オールド・ファッション・ナニー）に共通するものである。(藤田82)

2.5 ナニーの資格・養成校

ナニーになるためには特定の免許が必要とされているわけではなく、雇用主との面接が全てである。とはいえ、雇用する側にしてみれば、チャイルド・ケアに関する専門的訓練を受けた者に任せたほうが安心だという思いがあり、現代でも求人に際しては待遇の他に、ケア資格を明記することが多い。『風にのってきたメアリー・ポピンズ』の中でも、メアリー・ポピンズを雇う際にバンクス家の両親の会話の中で、新しいナニーをどう募集したら良いかというバンクス夫人の問いかけに、バンクス氏は「広告がいいだろう。」(6)とし、「1ばん安くて1ばん上等な人が大至急ほしい」(7)と条件を出している。また、秋島百合子は『メアリー・ポピンズは生きている』の中で、秋島自身がナニー募集の広告を出した経験を記している。「ナニー・シェアのための通いナニー求む。NNEB（保母資格）保有者または同等の方。9ヵ月と5ヵ月の男の子。ベルサイズ・パークに住む、向かい同士のプロフェッショナル・ファミリー。たばこを吸わない人。6月中旬開始」。(18-19) このように希望する条件を提示し、広告等でナニーを募集することが一般的である。

応募する側は、取得資格を明記した履歴書を用意して面接に臨む。ケア資格には様々なものがあるが、今日では、その中で最も信頼性が高く、通用するものがNNEBと呼ばれる資格である。これは1946年以降、全国保育試験委員会（National Nursery Examination Board）が認定したもので、取得者はナーサリー・ナースと称し、日本の保母資格に相当する。(楠78)

しかし、1994年4月に資格認定団体のNNEBそのものが、他団体と合併して一層包括的なケア資格認定団体CACCE（Council for Award in Children Care and Education）へと発展的解消を遂げた。背後には新しい国家資格制度（National Vocational Qualifications）の発足と、チャイルド・ケアの新資格導入という事情があり、NNEBの資格の効用は微妙に変わりつつあると言われている。(楠78)

このように資格は証明として役立っているが、以前の雇用主から「推薦状」を書いてもらうことも、資格以上に重視されるものである。先述の藤田が引用したゲイソーン・ハーディのナニーのように、子供に対して残酷に振る舞うナニーもいるため、現在でも推薦状は大きな役割を果たしている。

これに対して、ノーランド・カレッジ（1892年設立）やプリンセス・クリスチャン・カレッジ（1901年創立。特に貴族の家庭向けのナニー養成校として知られる）に代表されるような、近代的保育学を教える専門的ナニー養成校の設立が19世紀末から始まる。これらは従来のナニーとは

異なり、アッパー・ミドル・クラス以上の家庭出身の少女たちをアッパー・クラスあるいはアッパー・ミドル・クラスの家におけるプロフェッショナルな保育担当者として養成するための学校であり、今までのような伝統的なナニーとは一線を置くナニーを生み出すこととなった。(藤田82)

プロフェッショナルなナニーとはどのようなものか、20世紀初頭の少し古い資料ではあるが、ノーランド・カレッジの教育課程からもう少し詳しく見てみたい。

2.5.1 ノーランド・カレッジの教育課程

1892年に設立されたノーランド・カレッジだが、19世紀末から20世紀初頭にかけて、ナニーの変化とともにその教育課程を変化させている。

2.5.1.1 1892年のカリキュラム

1892年に設立されたノーランド・カレッジの当初のカリキュラムは、6週間の幼稚園実習期間を含む7ヶ月半の課程であった。(楠81-82)

- 3ヵ月 (学校) 午前 調理、洗濯・アイロン、家庭技術
(2週間単位)
- 午後 講義、幼稚園遊戯、近隣の散策、針仕事、手技
- 6週 幼稚園実習
- 3ヶ月 小児病棟における看護学習と実地訓練
- 3ヶ月 有給(見習待遇)の家庭内実習

(楠82)

2.5.1.2 1903年のカリキュラム

その後1903年にさらに高い訓練水準を実現するための新課程へと移行した。新課程では、学校における講義と実技科目の内容が拡充された。学校での訓練が6ヶ月間になり、幼稚園実習も3ヶ月間引き伸ばされた。また、家庭内実習期間が6ヶ月に延長され、新課程では18ヶ月を要することとなる。(楠82)

2.5.2 ノーランド・カレッジ成績評価項目・紹介状

教育課程を修了した者には、ノーランド課程修了免状を収めた手帳が授与される。これはテスト・モニアル・ブック(紹介状となるもの)と呼ばれ、パスポート大の冊子である。記載内容は、ノーランド校の活動趣旨、雇用と就労に関する諸規定、個人の履歴、在学中の成績、免状の他、白紙が綴じ込まれ、そこに雇用主による勤務評定が毎年記入されるようになっている。

在学中の成績の評定項目は実習機関ごとに異なり、以下の項目がある。(楠82)

<学校第1期>

実技力：針仕事、調理、洗濯、家政一般

知的資質：自然史、板書技術、唱歌、衛生、保育室管理、ストーリー・テリング

実践倫理：時間、整理整頓、身だしなみ、対人能力、気質、一般能力

<病院>

実践倫理：時間厳守・正確さ、整理整頓、清潔、対人能力、気質、子どもを楽しませる力、仕事への熱意、向上心、一般的能力

<学校第2期>

実技力：針仕事3作品完成、切り抜き

知的資質：第1期の諸科目、オブジェクト・レッスン

実践倫理：第1に同じ

期末試験：パスタロッチとフレーベルの生涯・仕事・実践原理・動物学・植物学、衛生とナーサリー運営

<ノーランド・ナーサリー>

実務能力：a. 下働きナースとして、b. 独り立ちのナースとして、c. 同等者と仕事をしていた、d. ヘッド・ナースの下でナーサリー・メイドを従えて働く副ナースとして

排泄補助、その他の生活習慣に係わるケア

子どもの身体に係わるケア

子どもの身ぎれいさ

子どもの衣服の管理・修繕

ナーサリーにおける知的教授、指導

a. 幼児の設定遊び（4歳未満）

b. ナーサリー・スクール（4-8歳）

子どもの幸福感と一般的ムード

道徳・宗教教授

教育方法

実践倫理：マナー、責任感、一般的能力

<家庭内実習>

ノーランド・ナーサリーでの項目の他、以下の項目

ヘッド・ナースとしての実務能力

実践倫理：時間・正確さ、気質、身辺整理・身だしなみ、客人の対応、召し使いへの対応（楯82）

ノーランド・カレッジの教育課程や公表する評価項目で特徴的であるのは、<学校第1期>の知的資質の項目で、唱歌や板書技術、ストーリー・テング、<ノーランド・ナーサリー>において、子どもの幸福感等が評価項目に挙げられていることである。現代のナニーは映画版のメアリー・ポピンズのようなナニーが理想となっているのかも知れない。また、ノーランド・カレッジの成績に針仕事や料理、清掃等の子どもの身のまわりの世話に関する部分と、時間厳守や身だしなみ、客人の対応や召し使いへの対応等のナニー自身の人柄を評価する内容が含まれていることも現代のナニーの特色であると言える。これほどの評価項目が設けられていることから、子育てにおいてナニー選びは重要であるとともに、改めてナニーが子どもに与える影響が大きいと理

解できる。また、現代のナニーは知識や技術、人柄等、総合的に申し分ないナニーとして評価されている。

そこで、次章では秋島百合子の『イギリスの女性たち』から、オールド・ファッション・ナニーへのインタビューを、さらに『メリー・ポピンズは生きている』から現代のナニーへのインタビューを紹介し、新旧のナニーを比較したい。

第3章 20世紀以降におけるナニーの変化

前章でも記したように、イギリスにおけるナニーは時代とともにその在り方を変化させて来ている。そこで本章では、秋島百合子と楠瑞希子の著書に基づいてオールド・ファッション・ナニーと現代のナニーを比較し、検討してみたい。

3.1 オールド・ファッション・ナニー

3.1.1 マリオン・バットへのインタビュー

秋島百合子は『イギリスの女性たち』の中で、35年間ナニーの仕事をしているマリオン・バットというオールド・ファッション・ナニーへのインタビューを紹介している。

マリオン・バットは現在、ロンドンに住む実業家の家庭において、住み込みで6歳の男の子と4歳の女の子の世話をしている。バットがナニーになって、最初に世話をしたのは裕福な家庭の4歳の子どもであった。それから、この家庭に2人目の子どもが生まれ、その子どもが生後6ヶ月の時から世話をし始めた。現在では、その生後6か月から世話をしていた2人目の子どもがマリオン・バットの雇い主となっている。つまり、親子二代続けてナニーとして子どもの世話をしているのである。オールド・ファッション・ナニーは一生の内に雇い主が変わることが3、4回程度と少ない。(秋島 (1979) 12-13、16-17) また、オールド・ファッション・ナニーが世話をしている子どもが大きくなり、ナニーとしての仕事が無くなったとしても、次の行き先がない限りナニーを追い出すことは絶対ない。(秋島 (1991) 127)

このインタビューの中で、マリオン・バットは、ナニーの仕事を開始した時のことを次のように語っている。

「あの頃、ちゃんとしたナニーのいるお屋敷では、それは素晴らしいナースリーが与えられたものです。そこは私たちが好きなように使えるんです」

(秋島 (1979) 14)

秋島によると、ナースリーとは子ども部屋のことだが、単純にひとつの部屋ということではない。ナースリーには、子どもの寝室や赤子も入浴可能な浴槽、台所設備のある居間、そしてナニーが使用する寝室も含まれている。(秋島 (1979) 14)

子どもたちはナースリーでナニーと一緒に食事をする。朝食とティー（この場合のティーは夕食前のお茶の時間ではなく、サンドイッチやゆで卵などの軽い夕食のことを指す）は、一般的にナニーが支度をし、昼食では母親も交えて調理室から運ばれてくるきちんとした食事をとる。昔の屋敷では、母親が来客の接待や外出をしていることが多く、子どもが母親と食事することは減多になかった。(秋島 (1979) 14)

秋島はナニーの生活について、2つの疑問を持っていた。

1つ目に、まだ若い年齢の頃に1日中子どもと過ごすことに対して、退屈さを感じないのかということだ。しかしこの質問をする前に、マリオン・バットは「私は人の子を自分の子どものように愛することができて、本当に素晴らしい仕事を得たと思うんですよ」(秋島 (1979) 14-15)と、発言したという。

2つ目に、24時間労働に等しい生活の中でどのようにしてプライバシーを守るのかという疑問

である。これに対しては、「赤ちゃんの時は寝ている時間が長いから、読書や編物もできるでしょう」と答えた。(秋島 (1979) 15) 秋島はこの回答を答えにならない答えとしているが、マリオン・バットの頭の中には自分の時間を作ろうという発想がなく、現代風の物差しで測ってはいけないと感じている。(秋島 (1979) 15)

最後に、秋島はマリオン・バットについてこのようにまとめている。

バットさんにいわせると、「ナニー人生」のすべてが素晴らしいものになる。これは本心だろう。すやすや眠ることしか知らない赤ん坊のときから育てるのが最大の喜びだというバットさんは、ナニーになるために生まれてきた人のようだ。

オールド・ファッション・ナニーというのは、バットさんのように、一生を独身で過ごすことが多い。それは決して寂しい人生ではなく、お屋敷の子どもにわが子同様の愛を捧げるということを選んだ、満ち足りた生き方なのだ。

(秋島 (1979) 16)

3.1.2 アイリーン・ボタレルへのインタビュー

次に、秋島百合子の『メリー・ポピンズは生きている』から、結婚し嫁いだ家庭で長年ナニーを雇っており、オールド・ファッション・ナニーを近くで見ていたというアイリーン・ボタレルへのインタビューを取り上げ、アイリーン・ボタレルが感じる今と昔のナニーの違いについて紹介したい。

アイリーン・ボタレルは、ナニーとの生活を振り返った後、こう語る。

昔はほんとうによかった。もう過去のことです。悲しいわね。そう認めざるをえませんよ。

今、自分のことをナニーといっている、ああいう若い子たちとはわけが違いますからね。腹立たしい。自分の都合のいい時に働いて、雇い主の車は借りる、週末は休む。ボーイフレンドを夕食に呼んだりまでするんだから。冗談じゃありませんよ。あのころは休みなんて取らなかった。ときどき家族に会いにいったぐらいですもの。ほかにやることもないでしょう。それより大きな屋敷では、使用人たちは使用人たちなりのすばらしい世界があったんです。

現在では、ノーランド保母養成学校のようなところで訓練を受けた人たちがいるけれど、あれはナース（看護婦）ですよ。ナース。彼女たちをナニーと呼ぶのは反対です。ノーランド・ナースが、子どもが大きくなってからもその家庭に残るなんて考えられないもの。だからあなた方（現代のナニーの雇用主）は大変だと思いますよ。お料理から買い物から掃除から育児から、すべてをやらなければならないでしょう。

とにかく私たちが知っている家庭にはみんなナニーがいましたからね。みんな、よいナニーの下で訓練を受けた、立派なナニーでした。そりゃあよくないナニーがいないこともなかったけれど、そういう人たちは消えていきましたよ。昔は推薦状がなければにっちもさっちもいかなかったでしょう。だからよい推薦状を書いてもらって紹介されて、そのハイレベルを保ったものです。

(秋島 (1991) 129-130)

3.1.3 ジリアン・ボタレルへのインタビュー

最後に、3.1.2で紹介したアイリーン・ボタレルの娘であるジリアン・ボタレルにナニーとの

思い出をインタビューした際の内容を紹介する。

ナニーはいつも一緒にいて、おもしろいお話をしてくれたし、ゲームもたくさんやったし、森に散歩に行ったりしました。彼女は強い言い方はしなかったけれど、私たちがおいたをすると、それをはっきりわからせる厳格さがありましたね。夜寝る前におもちゃは自分で片づけるようにと、最後の1つをしまうまで、じっと待っていました。(中略)

ナニーというのはとても忙しかったけれど、それでも人を見て、人の話を聞く時間を持っていたのですよ。私はいろいろな人や人柄についてよくわからないことがあると、いつもナニーのところに行って、判断を請うたものです。ほんとうに、母親と同じように重要な存在だったんです。

(秋島 (1991) 131-132)

3.2 現代のナニー

3.2.1 現代のナニーへのインタビュー

秋島百合子の『イギリスの女性たち』では、秋島が現代のナニーにインタビューをし、以下のようにまとめている。

3.2.1.1 ナニーという職業を選択した動機

秋島によると現代のナニーは次のような女性である。

明るい印象の23歳のジェーンは、ロンドンのモダンな高級アパートでナニーとして住み込んでから一年半、ショーンという男の子の世話をしている。ショーンの母親は離婚していて、社交生活が忙しいため十分に子どもの面倒がみられない。ジェーンは長女で、小さい頃から自身の弟や妹の面倒をみてきたこともあり、子どもと接することが大好きである。だが、ナニーになった理由はそれだけではない。(秋島 (1979) 17-18)

「だって海外にいけるんですもの。私、最初の仕事でパリにいったの。それから小説家の家で働いていたときは、取材旅行でタイと香港にまでいったのよ」

(秋島 (1979) 17-18)

これは、ジェーンに限られた話ではない。最近ではイギリス人の家族が外国への転勤の際、ナニーも同行することが多々ある。それだけではなく外国から、乳母はイギリスのナニーと指定されることも多くある。世話をする子どもの親から安心を得ることができる、イギリス特産ナニーというのは、新しいイギリスで静かな輸出ブームを起こしていると言える。特に中東の国で石油関係の仕事をしている裕福な家庭から、高額な給料で雇用したいという依頼が殺到しているそう。アラビア半島界隈ではイギリス人のナニーを雇っている場合、大きなステータス・シンボルになるという。

(秋島 (1979) 17-18)

3.2.1.2 現代のナニーの仕事内容

現代のナニーのジェーンは仕事内容について、次のように続ける。

「ショーンの食事の用意、衣服や子ども部屋の整理整頓に小学校への送り迎え。学校へは、私が運転するの。あとは、彼の遊び友達になってあげることね。(中略)

私がショーンのママと同じ日に出かけるときは、ベビーシッターを雇ってくれるわ。それから、ショーンがお父さんのところに泊まる週なんかは、私のパーティをさせてくれることもあるのよ」

(秋島 (1979) 18)

上記の内容から、ショーンの母親は非常に寛大な人だと推察できる。ジェーンの故郷であるエセックス州に帰る際には、ショーンと一緒に帰郷することもあるそうだ。これまでに、住み込みのナニーとして働いてきた全ての家族と良好な関係であると、ジェーンは明るく話す。

3.2.1.3 現代のナニーが描く将来

現代のナニーが描く将来の展望とはどのようなものか、『イギリスの女性たち』から抜粋する。

ジェーンの給料は食事と部屋がついて、週に25ポンド程で、日本円で1万円弱である。ここでいう部屋はオールド・ファッション・ナニーの時代に雇い主から与えられる、ナーサリーのような立派な部屋ではなく、寝起きをするだけのような一般的な部屋である。

(秋島 (1979) 18)

「ここのお給料は少し安い。そんなこともあって、私、もうすぐここをやめるんです。ショーンは、かわいくてしかたがないんだけど。実はね、アメリカについていかないかって話があるの。いったことないから、今のところアメリカは夢なのよ。イギリスのナニーは人気があるから、海外に出るチャンスはいくらでもあるわ」

(秋島 (1979) 18)

3.2.1.4 現代のナニーから見たオールド・ファッション・ナニー

現代のナニーのジェーンは、オールド・ファッション・ナニーについて次のように語っている。

「そうねえ、あまりいいとは思わないわ。もう時代は変わったのですもの。そんなにしつけの厳しい人もいなくなったと思うけれど、活発さに欠けると思う。私みたいに、子どもたちと一緒に駆けっこしたり、木登りしたりはできないでしょ。(中略)

子どもたちの面倒をみていると、つい情が移ってしまって、別れるのがつらい。でもナニーの必要な年齢には限りがあるでしょ。私たちは母親ではないんだから」

(秋島 (1979) 19)

時代とともに子どもや親がナニーに求めること、期待することは変化しているが、新旧のナニーにとって変わらない部分もある。それは世話をしている子どもに対し、大きな愛情を持っていることである。

3.2.2 オールド・ファッション・ナニーと現代のナニーの相違点

オールド・ファッション・ナニーと現代のナニーを比較すると、現代のナニーはナニーとして、子育てに関わりを持つことにやりがいを感じると共に、自身の時間を大切にしている印象を受け

る。それは、海外に行ってみたくらいという夢を追いかける姿や、休日をしっかりと取ることから読み取れる。海外においてイギリスにおけるナニーの質の高さが評価されているため、国外の家庭で雇用される機会に恵まれているようだ。3.2.1.1で記したナニーという職業を選んだ動機でも挙げられたように、現代において若者がナニーという職に就く背景には、海外へ行ける可能性を期待する気持ちがあるからのものである。また、ナニーに休日等の時間を与えてくれる雇用主も寛容であり、ナニーと雇用主との関係はオールド・ファッション・ナニーの時代とは大きく異なっていると言える。以前であれば、現代のナニーの仕事内容で挙げたような、雇用主とナニーの予定が重なることは考えられず、あったとしても、ナニーは予定を変更せざるを得なかったであろう。それだけでなく、新たにベビーシッターを雇うという事実には驚く。これには甘やかしすぎているとも受け取れるが、見方を変えると、現代のナニーは休日等の融通が利くことから、雇用主と現代のナニーの関係性がより対等なものに変化していると受け取れる。また、この事例から、現代のナニーが本当の家族のように大切にされていることが証明されている。

結論

この論文では、第1章「イギリスの就学前教育施設と制度について」、第2章「イギリスにおけるナニーの伝統」および第3章「20世紀以降におけるナニーの変化」を通して、イギリスにおけるナニーという職業はどのようなものかを明らかにしてきた。

第1章は、イギリスの幼児学習目標と基礎段階カリキュラム、イギリスの就学前教育施設や制度での教育およびイギリスの就学前教育での家庭教育（しつけ）についてである。まず、イギリスの幼児学習目標と基礎段階カリキュラムについてであるが、基礎段階は3歳から5歳までの子どもたちを対象とし、a. 人格的・社会的情緒的発達、b. 言語と読み書き、c. 算数、d. 世界の知識と理解、e. 身体的発達、f. 創造的発達の6つの学習領域から構成されている。次に、イギリスの就学前教育施設や制度での教育は、保育学校（Nursery School 保育クラスとリセプションクラス）、保育所/デイ・ナースリー（Day Nurseries）、保育ママ/チャイルド・マインダー（Child Minder）、合同保育センター（Combined Nursery Centres）、就学前遊戯集団/プレイグループ（Pre-School Playgroups）、母と3歳以下の子どものための集団/マザー・アンド・トッドラー・グループ（Mother&Toddler Groups）、ナニー（Nanny）の7つに分けられる。最後に、イギリスの就学前教育での家庭教育（しつけ）については、イギリスの家庭教育（しつけ）の特徴を3つ取り上げた。1つ目の乳幼児の生活習慣の厳守とは、乳幼児については決まった時間に食事を与え、就寝させることを大切だと考えていることである。そのためイギリスでは、大人の都合に合わせることによって、乳幼児の食事時間や就寝時間が遅れることを慎む傾向がみられる。2つ目の大人と子どもの区別では、大人と子どもは区別されていて、口にする食べ物が異なっていることが多い。また、旅行のプランには大人と子どもが別々に過ごせるように配慮されているものが多い。3つ目に幼児の言語による自己主張に関しては、現代のイギリスにおいては、幼児の言語による自己表現を重んじる傾向がある。E. ニューソンとJ. ニューソンは中産階級と労働者階級の親のしつけに大きな違いを見出している。また、イギリスの言語学者であるバジル・バーンステインは、中産階級は精密コードを、労働者階級は制限コードを使用すると述べている。

第2章「イギリスにおけるナニーの伝統」では、イギリスにおけるナニーがどのような職業であるのかを、ナニーの歴史、ナニーの雇用形態、ナニーによるしつけ、ナニーからガヴァネスへの交代、ナニーの資格・養成校の5つ側面から検証した。ナニーの歴史を遡ってみると、イギリスの上流家庭には教育の一環として、子どもを幼いうちから他家に預け、そこの主人に仕えさせるという慣習があり、子どもは他人の手で厳しくしつけ、苦勞をさせないと立派な大人になれないという考えがナニー誕生の背景にある。ナニーの需要が高まったのは19世紀のヴィクトリア期であり、主な要因は産業革命による上流階級・上層中産階級の急速かつ著しい富裕化にあった。子育てを赤の他人に委ねるのを厭わない風土や富の顕示など様々な要因が加わったことで、ナニーの存在はイギリスの子育てには欠かせないものとなった。まず、ナニーの雇用形態は、一般的に子どもの保護者と採用された志願者の間で交す個別契約である。昨今の雇用では住み込みのナニーと通いのナニー、そして別の家族と共用するナニー（シェアナニー）の3つに分類されている。現代では女性の社会進出で夫婦共働き等の家庭が増加し、以前よりも広範囲の家庭でナニーを必要とし普及しているため、金銭の問題が発生し、二世帯で1人のナニーを共有し、半額ずつ金銭を出し合うシェアナニーと呼ばれるナニーが存在している。次に、ナニーによるしつけは、テーブル・マナー、口のきき方、身のこなし、部屋の後片付け等、子どもたちのしつけの全てを

行う。ナニーのしつけでは、子どもに理解しやすいように動物を用いることもあれば、子守歌で教訓を学ばせることもある。ナニーは1日中子どもに付添っているため、子どもにとっては両親のようであり、大きな関わりがある。次に、ナニーからガヴァネスへの交代では、ナニーは乳幼児期のみ子どもを託す存在であり、子どもの成長に伴ってガヴァネスに交代させることが一般的である。しかし、ナニーからガヴァネスに移行する過程で子どもがガヴァネスを受け入れられないケースも存在している。最後に、ナニーの資格・養成校について、ナニーの資格で最も信頼性が高いものが、1946年以降に全国保育試験委員会（National Nursery Examination Board）が認定したNNEBと呼ばれる資格であり、日本の保育資格に相当する。（この資格は役立っているが、それ以上に新しい雇用先を探す際には、以前の雇用主からの「推薦状」が重視されている。）1892年にノーランド・カレッジが、1901年にプリンセス・クリスチャン・カレッジが創立されて近代保育学を教える専門的ナニー養成校の設立が始まり、今までのような伝統的なナニーとは一線を置くナニーを生み出すこととなった。

第3章はオールド・ファッション・ナニーと現代のナニーの比較である。先輩ナニーの下で下積み時代を経てナニーになるオールド・ファッション・ナニーと、養成校の教育課程を経てナニーになる現代のナニーとの間には、ナニーとして働くことに価値観の違いがあり、それが新旧のナニーの間に隔たりを生み出している。しかし、オールド・ファッション・ナニーは同じ家庭に長く居続け、雇われた家庭において生涯を通してナニーとして本当の家族のように過ごせることに長所があり、現代のナニーにはナニー自身の意思が尊重され、周囲の人々がそれを受け入れてくれるところに長所がある。イギリスにおけるナニーという職業には新旧のナニーのどちらにもそれぞれの良さがあり、どちらにも大きな魅力がある。

以上のことから分かるように、イギリスのナニーの制度の歴史は古く、20世紀に入ると同じナニーであっても新旧のナニーの間では雇用形態や価値観が異なってくる。『メアリー・ポピンズ』の原作とその映画版で主人公のメアリー・ポピンズの性格や子供たちへの態度が異なるのは、原作のメアリー・ポピンズが戦前のオールド・ファッション・ナニーを元に描かれ、映画のメアリー・ポピンズが戦後の新しいタイプのナニーを元に描かれているからではないだろうか。いずれにせよ、今日、イギリスにこれだけ多様な就学前教育施設がある中で、ナニーという制度が残ったばかりか、海外でも評価されるようになってきているのは、このナニーというイギリスの伝統文化が、時代や場所を超えた価値の証しであると言える。

引用参考文献

- 秋島百合子 (1979) 『イギリスの女性たち』サイマル出版会
- 秋島百合子 (1991) 『メアリー・ポピンズは生きている』朝日新聞社
- Avebury Diana. *nanny says*. (『ナニーの言うこと』) London: Souvenir Press, 1972.
- 新井潤美 (2005) 『不機嫌なメアリー・ポピンズ: イギリスと小説と映画から読む「階級」』平凡社
- 川本静子 (1994) 『ガヴァネス (女家庭教師)』中央公論社
- 木内信敬 (1992) 『総合研究 イギリス』実教出版
- 定松正 (2012) 『英米児童文学作品・登場人物事典』松柏社
- 定松正 本多英明 (2001) 『英米児童文学事典』研究社
- 佐藤啓子 (1989) 『イギリスの家庭と幼児教育』光文堂出版社
- 佐藤淑子 (2003) 『イギリスのいい子 日本の子』中央公論新社
- スティーブンソン・ロバート監督 (1964) 『メアリー・ポピンズ』ウォルト・ディズニー・プロダクション
- 榎樹希子 (1994) 「イギリスにおける保育専門職成立過程の一研究: ナニー養成校ノーランドをてがかりとして」『研究紀要 第二分冊 短期大学部』27: 77-84
- トラヴァース, P.L. (1990) 『風にのってきたメアリー・ポピンズ』林容吉訳 岩波書店
- ハンコック・ジョン・リー監督 (2014) 『ウォルト・ディズニーの約束』ウォルト・ディズニー・ジャパン株式会社
- 藤田泉 (2014) 「19・20世紀転換期イギリスの子ども部屋におけるナニーの役割についての考察」『平成音楽大学紀要』14: 75-91
- 山本麻子 (1999) 『英国の国語教育 - 理念と実際』リーベル出版
- 米村佳樹 (2003) 「イギリスの就学前教育制度の現状と特色」『四国大学紀要』20: 157-169